

# ぶどうの木



第273号 2026年 4月号

発行人 牧師 広田叔弘  
企画編集 広報委員会  
www.church.ne.jp/umegaoka/  
2026年3月22日発行

〒155-0033  
東京都世田谷区代田 3-37-7  
TEL : 03-3414-5772  
FAX : 03-3414-5778



## 『担うべき十字架』

牧師 広田叔弘

わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである。その火が既に燃えていたらと、どんなに願っていることか。しかし、わたしには受けねばならない洗礼がある。それが終わるまで、わたしはどんなに苦しむことだろう。

ルカによる福音書 12章49〜50節

聖書の中で「火」は「裁き」と「清め」を意味します。炎によって罪や汚れが焼かれ、清くなるわけです。主イエスは地上に火が燃えていることを願っていました。罪からの清めと信仰を願っていたのです。しかし地上には罪があふれ、信仰を見ることはできませんでした。

述べられている「洗礼」は受難を意味します。主はご自身が十字架にかかることよって人々の罪を赦し、神の愛を現わし、一人一人の心に信仰の火をとますのです。主イエスを信じるとき、人の心に灯りがともります。神さまが私を愛し、受け容れてくださっていることを知るからです。「神さまは遠くない。父なる神として、神の国へ帰るその日まで、私を生かし続けてくださる。」この事を知って心に信仰の灯りがともるのです。

豪徳寺にとっても美味しい焼き鳥屋があるの

です。早く行かないと売り切れるので、夕方の4時に買いに行きました。その日は臨時休業でした。私は腹が立ちました。「せつかく買いに来たのに・・・買えない！」そして腹を立てている自分が可笑しくなりました。私たちにはこのようなところがあるでしょう。小さな不運にひどく落胆します。持っているもの、与えられているものは当たり前で思ふ。些細なことなのですが、この態度が積み重なれば自分本位の人生になるでしょう。

主イエスは、私たちに救いを与えるために十字架に立ち向かいました。避けることも、逃げることも出来ませんでした。しかし、死に至るまで十字架を担い切りました。

誰にとっても越えて行かなければならない試練があります。それを避けたら、自分の人生を生きることにはならない険しい道があります。信仰は、主イエスと共にこの道を歩むことだと思えます。心には信仰の灯りがともっています。それは小さいかもしれませんが。しかし消えない灯りです。主によって現された神さまの愛が灯りとなって輝き続けている。この灯りを頼みとして、自分の道を歩んで行きたいと思うのです。

十字架の死は復活の朝へ続きます。ともされた灯りを頼みとして歩むとき必ず、大いなる光に包まれる救いの日へたどり着きます。